

悪性腫瘍の治療（特に化学療法を中心に）

- 1、悪性腫瘍と診断されたからといって、決してあきらめないでください。その予後は、腫瘍の種類や性質、病期によって大きく異なります。今は、スタートラインに立ったばかり、おうちの子と飼い主さんにとって一番良い治療法が何か、しっかり考えていきましょう。
- 2、悪性腫瘍の治療法として、一番効果が高く、行われることが多いものは摘出・切除手術です。次に、化学療法や放射線療法、免疫療法、特殊なものとして温熱療法やレーザー治療など多岐にわたります。この中から、今回の腫瘍に合った治療法をまず探さなければいけません。次に、その治療法が患者さんに合ったものなのか、実施可能なのか、検討しなければいけません。
- 3、治療の目的は、あくまで根治・寛解ではありますが、まず第一に優先すべきことは、QOLの向上、苦痛や辛さの軽減になります。その結果、根治・寛解が得られることが理想です。
- 4、さらに、治療や検査の負担を少なく、その効果を多く得る事が第二の優先事項になります。が、悪性腫瘍という重度の疾病と闘うには、ある程度の負担は覚悟しなければいけない部分があります。もちろん、「治療の負担<病気の負担」であることは言うまでもありません。

例) 治療の負担とは	例) 病気の負担とは
手術における全身麻酔や手術の負担	疼痛や不快感、倦怠感、体調不良
化学療法における副作用	腫瘍の出血や化膿、破裂
放射線療法における全身麻酔や副作用	腫瘍随伴症候群・浸潤・転移
CT、MRI 検査における全身麻酔や造影剤投与	合併症
- 5、病気とは「闘ってはいけない、上手に付き合うべきだ」とよく言われますが、残念ながら今は頑張り時、闘わなくてははいけません。また、むしろ「上手に付き合う」ことは難しく、しかもこの言葉はある意味医師の方便で、苦しいこととずっと長く付き合うよりは、少しだけ頑張って苦しい病気とさっさとお別れできたほうが、どれだけ楽かわかりません。ただし、長く付き合わざるを得ないのであれば、「楽して付き合うこと」を考えて長生きしましょう。
- 6、飼い主さんの精神状態も大きく影響する犬や猫たちですから、気持ちは「闘う」ではなく、「楽しむ、安らぐ」気持ちが大切です。「癌の治療はつらいね」ではなく、「よく

頑張ったね、楽になるよ」と声をかけてあげてください。また、出来れば肩の力を抜いて適当に、あわよくば手抜きを覚えられるような治療や看護を目指しましょう。

- 7、明日やその先を心配するよりも、今そして今日、元気で一緒に居られる事を楽しんでください。癌に限らず、重い病気の場合、気持ちがどんどん暗くなりがちです。せっかく病気と付き合って、勝ってやろう（引き分けで十分ですが）と頑張っているのであれば、そのご褒美はちゃんともらいましょう。それが、日ごろの苦労は忘れて、楽しく過ごすことだと思います。先の心配は、僕たち獣医師と看護師が引き受けます。
- 8、治療の効果や副作用を見極める点でも、体調や体質をしっかりと理解・把握することは重要です。また、治療効果の向上や体調の維持のためにも、食事や運動、しつけを含めた生活環境の整備は必ず行いましょう。また、重い病気だからといって甘やかしてはいけません。なんにも健康な子とは変わらない、その雰囲気作りのためにも今まで通りが大切です。甘やかす理由が重い病気だなんて、気がつかれないようにしてください。
- 9、腫瘍の特性や性質、症状などをよく理解することが大切です。わからないこと、不安なことは必ずその場で解決することが絶対です。どんどん、質問してください、そして相談していきましょう。
- 10、治療において、副作用や有害な反応、負担が大きい場合、どんなに選択された治療法が理想的でも、体調を優先し、中止・休止する可能性があります。
- 11、治療を行う場合、その効果の基準を決めるとスムーズに実施することが出来ます。例えば、腫瘍の消失・縮小、体調の向上、症状の緩和などです。
- 12、サプリメントは、自己の免疫を賦活化することで感染症予防や免疫不全の軽減、抗癌作用を示すだけでなく、悪液質や体調不良の軽減など、QOLの向上にも役立ちます。
- 13、精神的なリラックスは、絶大な効果があります。今まで好きだったお散歩や運動、ドライブ、旅行など負担にならない程度であれば、続けてください。また、出来れば飼い主さんも気分転換を。ショッピングや食事、お酒、旅行、アロマ、エステなど自分にもご褒美を上げましょう。その気持ちが、おうちの子にも伝わり、必ず良い効果があるはずですよ。

化学療法は、体調と効果を見極めながら実施します。今回は、() 療法) を () に行う予定 (別紙参照) ですが、病状や状況に合わせて日程は変更いたします。投与当日や翌日には、元気や食欲が低下する場合がありますが、決して、つらい副作用ばかりでなく、体調の改善や元気・食欲の回復に早く顕著に効果を表してくれます。

現在の体重	kg/	体表面積	m ²		
抗癌剤	投与経路	投与回数・期間	予算 (一回当り)	その他 (併用等)	
プレートニゾロン	内服	継続・週間	¥	抗H剤投与併用	
ビンクリスチン	静脈内注射	4回/3ヶ月	¥	救援	
サイクロフォスファミド	静脈内注射	3回/3ヶ月	¥	救援	
Lアスパラギナーゼ	筋肉内注射	1回/救援	¥	救援	
トキソリン	静脈内点滴	2回/3ヶ月	¥	救援/点滴/モニター	
シタラビン	皮下注射	1回/3ヶ月	¥		
ミトザントロン	静脈内点滴	代替/救援	¥		
クロラムブシル	内服		¥	救援	
メルファラン	内服	5日連用/3週	¥	救援	
ロムスチン	内服		¥	救援	
ダカルバジン	静脈内注射		¥		
ブレオマイシン	静脈内注射		¥		
カルボプラチン	静脈内点滴		¥	点滴	

併用薬

免疫賦活・抗腫瘍

AHCC D-12 サメ軟骨 アガリクス Dフラクシオン メシマコブ キトサン

消化器薬

ファモチジン スクラルファート アルビオキサ 止瀉剤 整腸剤 乳酸菌製剤

メトロニダゾール スルファサジン

強肝剤

ゲルタチオン チオラ タウリン ウルソデオキシコール SAME コルヒチン

抗生物質

消炎鎮痛剤 (NSAIDs)

テホキサリン カルプロフェン ヒロキシカム メロキシカム プトルファンール プブレンロフィン

造血効果のある薬

蛋白同化ホルモン 鉄剤 エリスロポエチン G-CSF 栄養剤

消毒薬・外用薬

検査項目

血液一般検査 (毎回) ㊦	特に赤血球数、白血球数 (好中球数)、血小板数 一般的に、白血球数 5000 以下、好中球数 3000 以下で投与休止
血液塗抹標本 (毎回) ㊦	各血液細胞の種類や形態、正常の判別
C 反応性蛋白 (毎回 / 週毎 / 必要なし) ㊦	腫瘍の影響を受けている場合、その病状の判定に役立ちます
血液生化学検査 (毎回 / 週毎) ㊦	腫瘍の状態や治療効果、副作用、合併症、基礎疾患の判定
X 線検査 (毎回 / 週毎 / 適宜) ㊦	同上
超音波検査 (毎回 / 週毎 / 適宜) ㊦	同上
CT/MRI 検査 (適宜)	同上
生検	
X 線造影検査	

化学療法の主な副作用は、骨髄抑制、免疫力低下、消化器障害、組織壊死、脱毛でこれらの作用はその強弱に差がありますが、ほとんどの抗癌剤に見られます。また、個体それぞれに感受性も大きく異なるため、どの副作用がどの程度発現するか、初めての投与時は特に予測が難しくなります。

主な副作用

P : 肝機能障害、電解質異常、内分泌障害、食欲亢進、多飲多尿、肥満、腎・心機能に影響

V (O) : 少ないが、消化器障害、末梢神経障害、脱毛

C : 出血性膀胱炎、潜在性腎毒性、骨髄抑制 (特に白血球)

L : アナフィラキシー

D (A) : 心毒性、骨髄抑制、潜在的腎毒性、アナフィラキシー、静脈炎、嘔吐

C i : 骨髄抑制 (汎血球減少)

悪性腫瘍の治療は、ただ単に癌を小さくすれば良い、というものではありません。仮に、腫瘍の大きさに変化がなくとも、体調や症状の改善が認められれば、その治療は良いものと考えられます。逆も然りです。

また、腫瘍には合併症や随伴症候群といわれる腫瘍に起因する症候があります。これは、さまざまな変調を身体にきたし、苦しめる原因にもなりますので、あわせて予防や治療が必要になります。

主な合併症

- 1、貧血・多血、白血球減少・増加、血小板減少、汎血球減少
- 2、出血、血液凝固異常
- 3、骨髄障害
- 4、心、肝、腎機能障害・不全
- 5、悪液質
- 6、発熱
- 7、疼痛

主な腫瘍随伴症候群

- 1、内分泌機能性腫瘍におけるホルモン分泌亢進
- 2、高Ca血症
- 3、高ヒスタミン血症
- 4、高蛋白・グロブリン血症
- 5、低血糖症
- 6、神経異常